

創 業 守 成

農林省農林水産技術会議事務局研究総務官 山本 毅

古くから「創業は易く、守成は難し」といわれている。何か仕事を始めることはそれはそれなりに難しさもあるが、どちらかといえば目標のはつきりしているだけにやり易く、これに対し、一旦成しとげた仕事をいつまでも立派にまもってゆくことは極めて難しいということをお願いしている。人間は一般に仕事に対する慣れの気持ちから驕る心が生れ、やがては安逸に流れ、バランスのとれた発展をはかることの難しさを戒しめた諺である。最近とくにこの守成の難しさが痛切に感ぜられる。これは単に筆者のみではあるまい。

第2次世界大戦後ほど30年、あの国敗れて山河ありのみじめな虚脱状態から、食糧増産に、工業生産に全国民一丸となって復興に努力してきた。その結果、国民総生産の年間伸び率は、10%を超え、世界第2位の高度経済成長を誇ったが、それもつかの間、高度成長のひずみから生じた公害問題に悩まされ、ついで異常気象、食糧不足問題が提起され、さらに石油危機、エネルギー資源問題が大きくクローズアップされてきた。日本経済はこれらの問題に対し、新たな発想で対処しなければならなくなった。各分野にわたって守成の難をかこつゆえんである。最近の毎日新聞の余録欄に次のような記事が載った。

「ドルの価値が急騰した。円の先物相場は1ドル318円に暴落した。円高ドル安のころは

1ドル260円前後だったから円の値打ちは先行20%も下がるとみられているわけである。強い円はうたかたのごとく消えてしまった。昨年2月、外貨準備高は190億ドルを超えていた。たまり過ぎた外貨をどうして減らすかに頭を痛めていた。それがいまでは120億ドル台に下がり、100億ドルの安全ラインを割るのも時間の問題といわれている。こんどはどうして流出を防ぐかの対策に苦心することになった。有為転変は世の習いといいながら、この間わずか1年たつたかたに過ぎない。青信号を出して進め進めといったかと思うとたちまち赤信号に変わり、止まれと制止される。まことに目まぐるしい。過密の交通地獄のなかに住み、ゴー・ストップの信号変化にならされているからなんとか耐えられる。そうでなかったら、頭が混乱してくるにちがいない」と。まことに皮肉な表現である。

これらの問題は、日本だけで解決することは困難であり、日本の一人よがりには許されない。こゝに反省の重要性がある。先進国といわれる国々の国民総生産の年伸び率は平均約4%、人口の伸び率は約1.2%、これに対し開発途上国の国民総生産の伸び率は約2%、人口の伸び率は2~3%といわれている。すなわち、人口1人当たりの生産の伸び率は先進国では年々高くなるが、開発途上国では逆に低下の方向にあることを示している。こゝに今後の世界の社会経

済問題が内包されており、そのような中で日本の国民総生産の年延び率10%以上を誇示し、いたずらに利潤追求に走ることは世界のひんしゆくをかうことになり、資源をもたない経済大

国は資源によって足元をすくわれる結果となる。

このような状況の中では、いたずらに守成の難を嘆くよりは、新たな観点に立つて、新たな創業の難に立ち向う姿勢が必要であろう。

年 頭 所 感

財団法人 日本植物調節剤研究協会会長 戸蒔義次

戦後の日本経済は、重化学工業の推進を軸にして成長したため、エネルギー需要は著増し、昭和45年には石油換算で30年の5倍に当たる3億1千万KIとなった。これに伴ない輸入エネルギーが増大し、その割合は30年の24%から45年には83.5%と激増した。その最大は総エネルギーの71%を占める石油であるから、アラブ諸国の石油輸出制限は大きなショックであるが、どうみても日本経済発展の基盤は脆弱・不安定と云わざるを得ない。

安くして使用に便利な石油の輸入を計るのは当然としても、同時に国産エネルギーの開発も重要である。核融合や原子力エネルギーの実用化研究もさることながら、もっと身近な石炭利用、水力発電など改めて見直す必要がある。これに関連して想起されるのは、戦時中の酒精原料用甘藷・馬鈴薯の増産である。戦争用ではあつたが、航空燃料としてアルコール・ブタノールの生産を芋から実現したのである。現在の航空機は当時とは比較にならぬ性能の故にアルコールは不適としても、地上輸送用の自動車・貨車には使用できると思う。輸入は相手国の都合に左右される。国産エネルギーの開発は、我々の努力によって確実に可能である。

最近のわが国農業において、成長作物と呼ばれる園芸・畜産、有利に処遇される米作に比し、畑作の衰退は顕著である。衰退の理由は価格や経営規模にあることは事実であるが、一般畑作物に対する軽視と畑地力増強に対する認識不足がこれに拍車をかけていることを指摘したい。麦・豆・でん粉など安価に輸入できるからと云って、これらの生産を軽べつする風潮さえ生じて、その栽培により耕地を豊かにし、国土を利用することへの尊敬を欠いたことは否めない。これが生産意欲の減退に繋がつたのである。国産エネルギー開発の見地から、衰退畑作に大義名分を与え、起死回生させたいと願う。

また欧州の土壌は、氷河により岩石が摺り潰されて生成したため、養分に富むのに対し、わが国畑土壌の多くは火山の高熱により焼尽されて養分的には藻抜けのからである。これを改良するには、欧州に増して堆厩肥・熔成燐肥・石灰などを多投する必要があるが、水田に比し手の打ち方が不足である。耕地の地力を増強することは、国土の価値を高めることゝ知るべきである。

新幹線を全国に走らすのもよい。四国に橋を三つかけるのもよい。しかし、それにもまして